

【パネルディスカッションⅠ】

テーマ

「世界で活躍するために、研究者は何をするべきか、何を支援してほしいか」

パネリスト：井上 紗綾子（広島大学 HIRAKU-Global 愛媛大学 助教）
井上 浩輔（京都大学 L-INSIGHT 京都大学 特定准教授）
岡本 泰典（東北大学 TI-FRIS 東北大学 助教）
秋山 肇（筑波大学 TRiSTAR 筑波大学 助教）
町田 奈緒士（名古屋大学 T-GEEx 名古屋大学 特任助教）

モデレーター：安浦 寛人（世界で活躍できる研究者育成プログラム総合支援事業 PD）
（敬称略）

【安浦 PD】目指す研究者像に向けて、これまでそれぞれの拠点で様々なプログラムにフェローとして参加し、経験が役立った点。他の大学の事例も参考にし、自身の大学にも同様のサポートがあれば良いと感じた点。また、他の大学では言及されていないが、必要な支援があれば提案してほしい。



- 【町田助教】心理学とカウンセリングへの関心が重要だと感じる。T-GEEx のプログラムでは、メンタリングや URA さんとの面談が手厚く行われ、特にメンタリングプログラムでは、専門領域に近い先生からの指導があり、研究と臨床活動の両立について助言を受けた。出身地が京都で、名古屋でのカウンセリングの実践場所を見つける際に具体的なアドバイスを得て助かった。また、科研費の添削に関しても丁寧なフィードバックを受け、科研費の獲得に成功した。お金の助成だけでなく、コミュニケーション的なサポートもありがたかった。博士後期段階から途中で精神的に参ってしまい、アカデミア進路を諦めるケースが多いことが周囲でも見られる。この問題に対処できるようなピアサポートグループなどの支援が、学生時代や若手研究者にとって役立つだろうと感じた。
- 【秋山助教】良かった点は2つあり、1つ目はトランスボーダーサイエンスキャンプでの異なる分野の人々との交流。キャンプではアカデミックな議論や雑談が行われ、異なる分野からの視点を獲得することができた。他の分野との違いに気付くことができ、寝食を共にすることでコミュニケーションが取りやすくなった。また、TRiSTAR の参加者と茨城大学とのコミュニケーションや勉強会の提案もあった。短期的な目標だけでなく、長期的なコミュニケーションを通じて、新たなネットワークを構築し、将来的な協力関係の可能性を模索した。このような機会は大変有益であると感じた。もう1つはメンター制度。緑内障の点眼薬を開発した久能祐子先生をメンターに選んでおり、専門分野が異なるにも関わらず、久能先生は私の関心事について多角的な視点を提供し、アカデミアや実業界での生活に必要な視点を示してくれた。これにより、個人的な成長の機会を得たと感じます。ただし、メンターはフェローによって異なるため、どのようなメンターを選ぶかはフェローのニーズに合わせて変わると思う。この柔軟性はありがたいと思う。大学の客員の肩書やポストを与えることは良い取り組みだと感じる。大学は議論の場を提供し、異なる専門分野の人々が参加し、リソースを活用してスピノフ的な活動を行うエコシステムを育てることが重要だと考える。これにより、大学の役割が拡大し、異なる機関に所属する若手研究者にとっても有益な環境が生まれると思う。



- 【岡本助教】 TI-FRIS や FRIS のベースにおける重要な利点は3つあり、1つ目は参加者の大部分が若手 PI であること。少なくともプロジェクト PI である。もう1つはバーチャルではないということ。そして中期的なサポートが提供されること。これにより、人間関係を通じて想定外の共同研究が生まれ、新しい分野にアクセスすることができる。また、Hub Meeting などの実際の研究環境を整備し、隣での研究を通じて共同研究がスタートすることもある。このような非バーチャル環境の利点は、共同研究の促進につながる。プロジェクト PI であることの重要性は、共同研究をスムーズに進める上で重要であり、Hub Meeting などの環境を通じて大きな利益を得ている。他大学の取り組みも魅力的であり、特に京都大学の国際活動に関する取り組みは非常に参考になる。これらの取り組みからインスパイアを受けることができる。
- 【井上（浩）准教授】京都大学は国際的な側面が際立っていますが、L-INSIGHT プログラムでの経験から良かった点は3つあるが、まとめると人とのコネクション。具体的には、名誉メンターのサポートメンタリングに参加し、中尾一和先生という権威ある先生からの指導を受けたことで、自身の立ち位置が明確になり、医学の領域での研究活動においても重要な進展があった。2つ目は論文の投稿の費用のサポート。経済的な面を気にせずにトライできるのは、共同研究を加速するきっかけにもなった。3つ目が一番重要で、国際的な取り組みへの参加。メルボルン大学との交流や学長会議への参加を通じて価値あるコミュニケーションを得られた。特に、メルボルン大学での出会いが疫学界のトップジャーナルの編集者との繋がりに繋がり、エディターの役割を得ることになった。これらの経験は L-INSIGHT プログラムのおかげで実現したもので、大きな成果として捉えられる。最後に、他大学の話を聞いて、PI としての柔軟性や役割の重要性についても考えるきっかけになった。
- 【井上（紗）助教】「HIRAKU-Global」は、海外への移動を奨励しており、フェローに行き先や期間などを自由に選択させ、経済的支援も提供している。また、フィードバックを柔軟に受け入れ、必要な支援を提供してくれることに感謝している。他大学の取り組みでは、異分野のセミナー。海外との交流に関する年度の調整が必要だと思う。中規模の大学である愛媛大学で地球深部ダイナミクスセンターに所属しており、研究環境は良好だが、若手研究者や大学院生が少ないために孤立感を感じることもある。広島大学のプログラムに参加することで、他大学の研究者との交流が増え、刺激や励ましを受けられるため、ありがたいと感じている。リトリートでの会話をきっかけに、研究分野が共通することがわかり、

その後オンラインやメールを通じて交流が広がり、共同研究などが行われている。

【安浦 PD】将来を見据えて、大学院生や学部生に自分たちの後を追いかけて研究者になりたいと思わせるために大学は今後どうあれば良いか。

- 【岡本助教】大学側が「若手をどう育成していくか」選抜ではなくて、どう育成していくかが重要。『Researcher+』は、選抜ではなく育成に焦点を当てていると思われます。大学の選考基準や科研費の取得方法など、どのように育成していくかが重要であり、選抜から育成への転換が必要だと考える。
- 【井上（浩）准教授】機会を与えてほしい。新しい人や場所に出会い、新しい視野を広げることは、世界中でも、日本国内でも可能だと思う。そのような機会を積極的に提供してほしい。
- 【井上（紗）助教】女性として、性別に関わらず能力に基づいた選択が重要だと考えている。女性が増えることで男性が排除されることは望ましくないと思う。能力に見合った選択が最も適切であり、性別や国籍に関係なく、能力に基づいた社会が良い。
- 【町田助教】大学院生のメンタルヘルスの問題が深刻で、研究職への進路を目指している学生が脱落するケースが多い。メンタルヘルスの支援が重要であり、大学が介入する必要があると思う。また、ジェンダーバランスに関しては、研究の一時中断があっても復帰しやすい環境が必要であると考えている。さらに、人生のライフイベントに合わせて研究活動が柔軟にできるような環境整備があると良いと思う。
- 【秋山助教】TRiSTAR プログラムに関して、企業との連携を強化していくことが重要だと考えている。産学連携は資本主義の枠組みに疑問を持つこともあるが、新しい資本主義の在り方を提示することも可能だと思う。特に、人文社会科学の視点から環境問題などに対処することができると思う。こうした連携が社会構造に影響を与え、次世代に何を残すかに関わると思う。2つ目がダイク・ダイバーシティ・シナストリー？。人はそれぞれ異なる視点で世界を見ており、機会が与えられていない人々も存在することを認識することが重要だと思う。例えば、TRiSTAR で行われたダイバーシティに関するセミナーに参加した経験を通じて、若手の意識が社会問題にどれだけ関わるかについて考えた。この問題に対処することは困難だが、アプローチする必要性を感じる。3つ目は人をいかに育てるか。大学では、教育が非常に重要な役割を果たしており、研究成果を教育に還元することが重要。これは、研究者だけでなく一般市民にも関わる問題であり、一般市民が発信する情報には未来があると思う。そういったところに、いかに教育に絡めて、若手の研究者育成と研究をしていけるかということが大切。4つ目が、学会との接続。TRiSTAR やシンポジウムなどの活動は楽しいが、学会で話すと「何それ？」となる。ここでやっていることと、学問分野で深くやっていくということがうまく繋がっていないように感じる。新しい大学を考えるというのは、新しい研究や教育の在り方を考えることだと思う。若手の支援だけでなく、その支援を活かして新たな学問を発展させることが重要だと感じている。個人的には、若手は支援を待つのではなく、自ら行動することが必要だと考えている。そこに支援をしていただける方とうまくコミュニケーションをする中で、いろんなサポートをしていただくというのが新しい研究者像だと思う。